繪本豐臣勲功記

五編

壹

櫻澤堂山編輯
一勇齋國芳畫

繪本豐臣勲功記五編

浪華書肆　群玉堂
文海堂

甲州新太守
伊奈源四郎
武田勝頼之
衰像

甲斐源氏嫡流武田
太郎信勝少年像

右府
寵臣
森蘭丸
源長秀
之像

織田殿女官
小侍従阿能局之驍像

強位征夷大将軍
ト岐源氏明智
光秀之像

岐阜中将
織田信忠之像

繪本豐臣勲功記五編巻之壹

目録

秀長光秀須東西征丹州
屬光秀欺和
光秀餌老母攻陷八上城
屬赤井由緒

織田右大臣
平朝臣信長之像

八上の多和郡小在く篠山城藩

繪本豊臣勲功記五編卷之壹

江戸　櫻澤堂山　編輯

秀長光秀須東西征丹波爲光秀誅和

水孫を懷いく川媚たり。主良々多一ば其邦をなつち英なり。若小丹州八上の城主波多野右馬の大夫秀治とつふ者ハ。河内国庄大臣魚名公の苗裔田原藤太秀郷。の後胤にて。波多野次郎義通が末なり。然るに丹波の一國ハ。元弘建武ゟ。赤井。波多野。久下長澤の四家をもて代く國中を割領せーが中須ゟ。細川家の一和領となり。波家ハ内義彼和守元重ゟ後代とてく。執政ゟ。惡仁のこだまとなり。ひづくも紙く戦國となり。法ゟ漫里弱ゟ亡ぶ。ぶ。て丹波の四家も遍に武威を挑て爭ひ。波多野家小良將ゟ。赤井

長澤久下の三將もこれが旗下にて屬したる。頃ふ内義を推戴しまく。
遂ふ一國を領續し。數領をまく。東波多野と號し。八上の城に在住し
これを大將家と尊稱し。庶流をまく西波多野とし。氷上の城に居
住せり。是を當して副將とし。惣ふ天文末の頃八上波多野と繼ぎ 晴通の世なり 小家
督なりをまく。一族波多野秀行が二男ふ繼丸を養ふ。八上の家臣
相續させて右衛門大夫秀治と號らせたり。此秀治に同後
の妹二個あり。一個い當國保津の城主赤井悪右衛門尉遠の妻とな
り。一個い摂州三木城を別所小三郎長治が妻たり。又秀治の弟遠
江守秀尚を亀山の城ふ居らしむ。彼の如く一族親類一國のうちに
割據して。各信義を失ふ。漆膠和平滅ぶるべし。信長公先年
より。度々帰服なさしめんとまをども。遂ふ一度も上洛せず。賄毛利

ふ隨順して。織田家に款の色を顯し。別而長治と謀合せまく。既に大志
を敗企たり。是ふ依まく信長公去ぬる天正三年の秋。就而一揆を遣治の
後。惟任日向守光秀をまつりまく。丹波征伐の部將とせらる。然かるふ光
秀ハ。丹波山城の謂なる大井川をうち渡り。乳房なること。遺ふみれども。
波多野の一族更ふ怖まず。然る而ふ去年七冬。丹後但馬の國人等。波
多野を背ひまく謀反しまれ。これ伐攻人と成波多野。出陣ふしまく虚
なる伐囲ひ。時こそ宜けまと惟任光秀。瀧川一益長岡藤孝俊の加勢
を得まく。亀地より丹波へ乱入し。亀山の城ふ推進遂ふ城を遠江守秀尚
を遁出し。光秀遠地ふ在城して漸まく威勢伐得たりしを。今ぞ波多野
伐亡盡せんと天正六年四月十日。波多野が旗下。荒木山城守行重が籠
守たる。出雲の城ふ推進て。烈火の像く攻起る。中にも明智治平二光春。

死憤を發して血戰なり。遂に水の源を斷截し、山城を率攻せんと。城を開ひく降参にこれ有るつく日向る其趣旨安土城へ委細に言扶した てまつれば。信長公感悅まして。就中光春が忠戰神妙なりと所感のあまり。左馬介なりくださる。光秀も光春面目を施し。光秀も亦感のあまり。後の一字を改めさせ。弥平二光春を明智左馬介光俊と号らせつまつさ次郎光忠をも。改名して。治右衛門と称へさせたり。其ハ閑き羽柴筑前守秀吉ハ。同年四月十二日。安土殿の軍加勢を得て。崔澤をるまぐ歩び驍を。然ばとく三木山ちかく陣勢を進まつせ。彷地を撰んぐ陣を結ぶ。敵ふ猛威を見せたりける。晒よ大將信忠公。攻蒐らんと指揮なりしを。秀吉堅く制止しぬいつくせ。只城兵を怖しかべ。程なく自滅はをまつくんふ。彼まで自軍の威を視せつけかべ。面撓ふい氣煩しかるべ。日今心頭を燃ぞる。丹州境の敵徒なり。波多野赤井俊。法藏にしく恐くハ光秀が隊ふ餘溢らん。遠方より西丹波へ隊番せんふ後宜よし。所検使命屬らまこと。小原が兵を隊かして。まず丹西より攻着まうさハ。夫丹州の軍理をもて。頭これ戰考るふ。丹波多野人將家を叙らく。赤井の族勇猛なり。そぶなくまく毛利の一家これを助けて戰つ。光秀一個の膂力をもて。東鑒かんことおりひも寡らば然ことを。毛利本も勢威まさり。それのこなるべ紀州の一揆。根州石山本願寺と通じ合せ。丹波勢を導ふくく。愛宕山より洛中へ枕投び。辭し紀大事紀里ぬ。右にもたふも毛利家の丹波へ出陣せざるうち。那州戰平治せぞ人をつくべと。惠訟るふ信忠公遠ふこを戰義引あ里。然らば平まづ帰洛して。伊丹境の衛兵を堅ふ。丹波へ加勢と下

を慶〻しとす。一度京都へ還らせ給ひ。又信長へ注ろひ弦をつて。秀吉れ弘を信吉〻るゑ右大臣にも猶ふりとおがされ。伊丹境を陸〻衛らせ。所撰使とし〻く丹州へ向ふ。個〻にハ織田上総介信包筒井大和掾順慶。堀久右衛秀政後。その外ハ蒲生不破蜂屋佐〻木筒ゞ方よりの人数ゞ残出せべく。所指揮ハ丹波へ向ふ〻め嘗〻くまく。播州勢ハ三田口より。惟任日向守光秀。池田勝三郎信輝。塩川伯耆守。中川瀬兵衛。高山右近俊秀等。せ〻れ日向守に力を勢せ。京丹波を征服紀とゝり。又ハ筒井順慶。丹西を征めんと欲せとゝいへども。三木境も虚〻なるを。舎弟小市郎一秀長を大将とし〻く。脇坂甚内安治。中村孫平次一氏。粕谷助右衛門武則。加藤孫六嘉明を相副へ。その勢二万有餘人。その外丹波。但馬。播磨。

人八百餘人を導かとして。織田上総介を衛護なり。いにかひ行をも列衆ゞ偽く。西丹波へ乱入せ〻るハ。波多野主殿頭宗長の旗下長澤内記久下孫六郎俊。別彊まぐ出費し。遮へ防ぐといへども。秀長自勢伐指揮なし〻く。猛威を奮ひ。征紀をれを。久下長澤俊ハ共ち破れ。敗走し。為将とするに戦頭に。こを示ふりて羽柴勢ともまち。国中一殺投なり。氷上の城。推進んと。軍儀をそ示。波多野宗長の嬉子英俊も宗貞。傑氣の勇に怒り。伐戦〻く。上方勢を追散さんと。二千餘騎にて八幡山陣ゞ撃て発。憤虎怒龍の氣を吹〻し。進軍の案内者小野木雅楽頭。小田垣但馬守。神谷義吉丈俊を掛頭し。終ふ三人ゞ首捕奪ひ。進軍の二陣ゝ突蒐る。羽柴秀長ゞ二番隊ハ加藤孫六。脇坂甚内。粕谷助右衛門。蜂須賀小六俊。騎馬千

波多野宗貞
傑氣を振ふ
加藤蜂須
賀脇坂
淵と八幡
山の戰ふ

武勇士卒。捷騰する波多野勢へ。沸潮の様く殺奪しくれば。両軍の奪威山門林野も。震動するとりにくふ。剃い挑闘ひしが。加藤嘉明須賀。脇坂彼ふいとか彷とと絶ふべき。宗貞ちろ八。弟長に揺れど。自兵大き損亡しく協ひ。ひくくと見えるわどふ。當天の暮る伐退足にあし。八幡山へ逃たりしが。従兵戦ふ氣色なけきを。彰くい防戦ありがくしと。遂に氷上へ率退く。遠よおいく羽柴秀長。頼て秀吉が授ける。謀計をおこなふく。次第に國民を招撫ばけ。老人あるひハ婦童児。扶弱薬を嬢を別け。おかく七金銀を獻与へ。健固ある族類ハ。案内者として軍事に用ひ。治國安穏の利を謀もとふど。百姓都て歓び合。我も唱もと走来り。軍備の役伐助るもの重。一揆を起して。波多野の城下に乳姫るも多くりなる。秀長得たりと。既に同じく六月十六日萩野の

城下推進ちろ伐。柔取（松久孝郎一番槍也）城主萩野虎六郎を湯朝通を撃捕ら。首ハ加藤六郎左衛門と。波多野宗長これを听ら。天作ち宗貞ハ貞数を授け。スト戦和ちが力勢ちに。茲ども波多野家ハ滅する晌と覚悟くれハ。百餘の小勢をちく。英くしく一戦なし。城和守と一齊に自殺を遂て殘たりなる。進兵由ちく驍ふ猛ふ。久下の城を走地ふ奈捉り。茲しく氷上へ推進る。宗長もまく時運を奈断。肚搔裂く罪くられた。旬を経ぬ陰ふ西丹波。金悉く平伐。宗丹波を征伐せんと。亀山にくり。潮ひくる。頼く丹州ハ光秀が。多年當國ハ厳守とし。波多野を殺め赤井長澤。ふ領伐たる歌なれば。他人ふ助軍さ。屈ふ。ねを。目今秀吉が隊をちく。西丹波の地を攻取ら。彰ちり平均せくまく。光秀他年の軍労も。一時ふ空しく敗失て。

（播磨八山城の図 毋隠之元 部分）

鄙怯の笑を招ぐんこと。最朽憾ぐいなりと憤怒に勇戦懸すつま
づ播磨の城を攻抜き。平井の城ふ在陣ゐし。波多野右衛門大夫秀治
ゐ籠るこる。八上の城を推捕囲む。浩る而に統勢にうり。池田。弓山。丹
羽。蜂屋。中川。ゆんど進来り。光秀と一隊にゐりしゑ。これにまた軍
威を得く。板敷山。天王山。丸山。岩山ゐどいふ諸城を一畫夜にして攻陥
し。遠威ふ奏ぐく。八上の城を奪ひ執んと。斜めけども。城固く主法
ゑ。ばゑづふ圭亀ハ見えぐりり。そのうちふ説西丹波ハ金悪く平
治して。秀長諸和ふ兵士戍稠置同月下旬帰陣せり。それと聆より
光秀ハいよ〳〵憮念の鱗斷しく。諸将を安土へ帰さしめ。一隊をもゆく
攻盡さんと其方郷をゞ繞らしくる。甚るふ波多野秀治。全弟秀尚
へ。猶威を奮ふて敵対せしゑ了得に智勇ゑ光秀も猶し徒で徒虚ふ

数日を送るといふとゆゑども。其方便さへなかりしが。決と一為の工夫浪得く和
睦の剣を用弊んと使者を敵城へ遣せし。理を解道を量通て。和平ゑ
籠に光秀の。老母をもつく人質ゑなし。八上の城中へ遣せしゑ不覚
なりる事係なり

光秀倆老母攻陥八上城一屬 赤井由緒

君小忠し。親に孝し。朋友に信義せぞんば。事全く成就しがゑ
無る小惟任光秀ハ八上の城を攻陥さんと。老母をもつ人質ゑなし
秀治秀尚と和議せしむ。此ふ因く波多野兄弟即地其意ふ随従し。
光秀ゑ老母を城に宿を。翌三日兄弟従兵僅十一人を率随へ。光秀ゑ陣
に来りられば。歓喜ゑる鋒渡まるく。雙方和睦の禮式おもり好ゑ結
ぶの酒盃を傳し。頭て開号やゑしたりゑん。光秀持たる盃代陣紙

光秀
謀計て
波多野
兄弟を
活捉る

へ機会と投着なれば四方の戸障紙跳放しく露出たる鞍の力士と
き者らゞと競蒐り。面目ふ兄弟を擒へんとて。秀治秀尚心得うと
ち刀脱撃く近進寄て。左右ふ薙起砍倒し。當る我冠と憤殺を。慈
ども多勢に歯しがたく。数箇所ふ疵を被まく。十字路ふ索を被う
きてう。從者十一人も活捉ふして。安土の城へ送らるてう是六月二日也八上城の城
兵これを聞て光秀が和為を大ふ憤て。主人の安危いかゞふやと。欲れ蹤蹟
を窺ひ在たり。偖光秀ハ人質の老母を欲より拉逸さでハ不叶れ大罪
に陥の譏謗拔れば。万望老母を捉逸さんと。い給く計謀ゆれども。城
兵嚴くその術ふ乏しく。主人の兄弟を素の如く帰しゆえば老人と
も逃與奪紀ふと呼ばりなるゆえ。光秀目次ハ詮なく。安土へ使者
を當發し。波多野兄弟が死刑をりて。暫く所望ゆゝと。訴へ

ける我信長聞しめされ。波多野兄弟が偉ふ於ては罪名既ふ決した
まとて。終ふ誅戮せられ。城兵ども我を脅出し。或ハ哭き或ハ瞋目。
主人殿を恨ひしうハ。俺們いまで赦命きべき。人質ゆりとも頑殺
し。主人の憤恨を慰せんものと。城兵四又十寨楼ふ登り。進ては敵に
向ひて。聆より光秀潛ふ歎び。又ハ降参するかうと。名ざ城中に
到まるる我。城兵それと着るとうも。寨楼の射窓を推開紀。且ハ罵
り且ハ怒り。叫んぐ光秀にうち射ひ。汝俺們を欺さて。主君なりとる
御兄弟。御命に別條なゞ。妄言我を紀謀ること。偽なりとハ快
知ぬまゞ。倘やと今日まぐ試量せしふ兄弟衆を誅せ。鐘。それ分明
に聆知うう。故ふ俺們自害して。主人の蹟を追慕せんとて。光秀汝ふ
送りし人質。受領やゆと呼まば。老母を擎起寨楼に登せ。見るく

豐臣記五編卷之一

組子に捻揚斬して逸を受領と謂陰も同じせび光秀が老母を捕へて逆倒に多捕足捉吊揚二個の兵士が太刀掣練め頑劇く其柔ふ死骸を下へ抛墜し。実に同類に嗤ふ。光秀こを着るよりも氣も魂も消滅る如く狂激音さ悲嘆しゐるが。氣を翻して大ふ怒り。大喜拳て自驍に指揮なし。斯い城中へ攻撃と。を二を三に突殺しつる。まづ城下なる老母の死骸を捕扱ふ。せく扛入さを。信く兵士伐懸ずして。単謂急ふ攻さを。ゐゐふ。頗く覚悟の城兵輩も。忿怒の戈戟を拒防ふ術なく。逐ふ面関を来破ら是。城兵一個も殘ずく。生ける者ハ剣さ。数を盡して斬殺しぬ。原武者ハ光秀が実母れ叔父を庫頭光安の妻にしてなる助光後の実母なり光秀 慈愛に仕き昔ゆ養育なせし母なれば恩義最も大なる故今又殺ふまるこを安ずゝ絲過日安土へ預ふく。波多野兄弟ハ諫戮を延恐ぐ。さる爲に般ぐと。訴京しかども。信長兼係しゐひしゐば。光秀大ふこれを怒こ。諫殺れ萌生を結びなり。彩くハ光秀年来の大欲波多野兄弟伐誅伐しく八上の城を奪ふとい〳〵ども。茲ふ一方の強敵あり同国保津の城主。赤井悪右衛門尉遠といふ大力を雙の猛将あり。波多野秀治が妹婿にく。奥丹波を堅めたりしが。国中の諸士今ハ皆。負を竭して明智に随ひ。敵ふる業もなさ。赤井遠只一個屈する色なく牢城せり。是に依く惟任光秀。六月十六日を以つく。保津の城へ推進さり。然ども遠城強ふ攻れを。短政に攻ること。既ふ一旬を過ぎども。為城を固さ氣色もなし。猶てや炎暑に困めゝ是く。強攻徒を久れば。遠遁へ一意退軍を図しゝ者兵を纏めく率退さ。同じく八月下の又日。若び亀山を進發して。奥丹波へ乱鬱ふ。遠晌羽柴秀吉より。惟任光秀へ加勢として。又百餘人の軍兵に。脇扱甚内を大将とし。丹波境へ當遣を。筑前守が其意注ハ。遠須赤井

兵右衛門病に犯され起居安からざりけるより残同者多く怯所出し
たるを云に遠圖ふ案して推進ぶべ丹波ハ亜地ふ平均のうんと謀役く
脇坂を加勢と称し遣したり。こを不固く日向ち。警戒統で保津へ推
進せ。喊を作り吾統を鳴を軍威伐示しく試せるふ城兵敵に劣らず。
防禦し。猶も屈せず一戦を度し。螺鼓撼鳴しく推寄し。遠を詮途と
戦ふ態を脇坂甚内精しく視く。彰てハ力戦を益ずと光秀にうち
響ひ城兵をもく降参さんに軍勢を退せ引と。勅を検にもと同意なし。
まづ軍を四五丁退ぞけ。誰ぞ使者に遣ぶ甚内左右に
曙ぶ。乃更往く京遠を帰伏さんと望ぶるに光秀これをよう
しく高議と示一決ふ。脇坂安治只一個亜地ふ欲城へ赴きぶり。弁も
遠赤井兵右衛門が家緒を精しく諮ふ。素原村上源氏にしく枝系丹

刑に散在し。掃部頭頼季七代の曾孫。赤井義太京廣。同次郎京継兄
弟源九郎義経に随逐し。一の石ふ勲功せ。義太ハ遠ふ能登守教
経ふに戦死に。弟次郎ハ判官を供しく奥州まで下里。安宅の関ふて。
義経に代換く忠死を遂たり。其後右幕下兄義経ぶ二男をもつて家
督を續せ丹刑部卿を賜ふ。赤井義経郎京真と帰に。従来八
代相續しく。赤井義次郎京忠ハ。万夫不當の勇士なりしを足利等
持院殿。丹刑部山城守着陣のさぶり。弟一番に戦着はつせ西国まで
隠身せり。其忠功を所威ひりこ。和領加増ぶしるひ。丹波国を賜ふ
ある遠晩刑部に任ぜられく威を国中ふ振ひり。當日京忠遊猟し
て。大江山ふ投けるぶ。機会よく獲物多うりられば。主従偕に歓饒こ。猶
山深こと狩起るに。當ある巖の洞窟より。現熟きぬ獣物飛出り。其

赤井景忠
大江山ホ
狩〻
二頭の
老貉を
獲る

色赤く縊ふして形模糊ふ像たるとぞも林長たることを尺ふ餘れり。色
いふる獸ふや。猩猩そもそも号を獄る蜜ゆ。本来嵩根の嫌ひあり。
跳躍ること猿猴の像く。勇く擒獲ことゆくさ〜。大膳猛氣の刑部京
忠。これを視るより驚いおり〜。先我弓丸巻を露せんと馬上ゆ
に頭眞の兼根翁拭く之を搭ひ。聰地放てび羽鳴して矢的に中き
ど獸の渾身鐵石よりも牢固にや。鏃碎けく飛迸るふ了得て京忠
驚くふし。亜箭を搭ふく射番るふ。その矢も當らぐ飛去たり。立迫
ことに齧斷ぜ〜つ。先遠上ハを捨にせんと刑部馬より跳で卸り。攻率
ふ指揮〜く四方を圍囲せ。彼猛獸を近く追進せ。巨碎を乱ろげく
を頭と擬抱止。膂力に信せく拉ぎる。遠大力に彼猛獸首足を自由
に動〜得ざれば。京忠遂ふ敷伏く。強力ふき劃。嘷のゆ〜ち伏ふ頭

掴ふ刺ゆるゆ窮不にや當至ん。獸ハ吽と一歩〜て。鮮血混くと涌出せり。
又ふこと爰なれ遁さでと力に信せく戰慄〜。遂ふ獸を刺止たり。活ると
ふ孤一赤一頭寸ふ遠ふ猛獸の方位殺されふる獸をば。慕ふる相ふ朱鞘
焦り。検ふ畏〜に聲伏幾〜。吽行ふく跳遠ふ伏。刑部京忠眈と視く。
又ふハ雌雄とおびえ〜う。遠叙も活く安ゆ〜と窮不ハ既ふ知得れ
べうふ矢搭ハ能引く。放ふハ覘的誤遁たび。首筋下に馬殺ふ行。痛幸
に搭〜ぐ倒ふ伏。京忠之侍至刺徹〜。希有にも孫ふる牧を獲う。
吁嬉〜やと雀躍〜法。二頭を駛率ふ拉捻ふ也。日の暮ふく刑部帰城
ゆ〜ふる。然ふ當夕刑部ゆ羨想ふ。二頭の獸枕ふに現来りふれふ
大に山ふ数百年を歴ふる貂ゆ〜し。貴人の勇猛ふ歌〜ぐく。今日
遂に害せ〜ふ一たり。然ども雌雄共に死を遂ふれば遠安波に殘る

景忠夢中ゐ
老翁の告を得て
赤井家の
長久を
願ふ

前

怨い更にあり。唯頼くこうれ〳〵ぐ。雙の首を接頂さ。華さくあるこべ。嚴い永く
遠世に面止て。所家の寶よあり〜まあるこせ。武運拙く縁を大災を除うん。ふ顧
頼ふ遠鐸ありと。結るよと見し〜爰い醒て。曉迄窓に瞞こうり。景忠喜吳
けあるひとをあり。教指の如く。蟬雄れ首を接欠さ。城の乾れ隅に瘞め。數十
個の僧を請待あり。大般若経を讀頼ゆさ〜め最懇ふを弔ひる。扨其
嚴いその来に庭の陰へ弁置たりしが。いけう四足も拂墜さ。肉が飛ること
疾却しなれを。其長四天有條あり。て。完慈華財嚢に髣髴こう。万金
にも換へぬ孫若ありとく。京忠こげう遠華嚢ふ刀劔を納まく孫童
せり。其より以来赤井家へ。愈掃〜富業。武光月くに盛なること。鉛の
如鑑にやありぬ爲なん。遠京忠より連綿とふ孫六代を相續ふ〜。
赤井右京亮丈家清ふぐ。丹波之邪氷上天田郡井の之邪也に領主こうて。威勢昔

日ふ晉らぐりしが。波多野上総介道晴。遠国を領〜こうり。遠ふ怨切
を通ふ〜合。上総介ぐ息女をりく。右京を丈が室とあ〜。是に好親を厚ふし
て。猶後を望ふせ〜かど。不幸ふ〜く早世に最期ふ除て舎弟たる赤
井悪右衛門ふ遺言あ〜。幼子と二の貂の草を付屬し。寂然こうて後〜
こう。其后京遠波多野秀治が妹を娶く。氷上天田の二邪を讓を。交
情いよく疎からざれど。丹波一国法盛なりしが。遠遺織田家に攻通ら是。
一門悉く滅亡あ〜。保津の城のこ殘ふかんで。城主京遠疔の腫瘍
に悩まさ〜。身體全く衰ふれども。大勇猛氣の西右衛門。此も弱る氣
色を見せず。猶後を懇まして。美〜〜一戦を喰快あし。戦死あうんと
禪らふこと為へ。歓陣よりの使者こうて。脇坂甚内来まるよ〜。養者を
聆ようも。京遠不歓の丈夫あれを。快対面〜て得さまづ死ふと也地

に甚内を本丸へ深くと呼投つも立賓の座席宮りさく一立一客雙方
ともに。後者一人もなりしを。甚内かしこく感佩し。自然と心驚服しとも
もく禮を厚ふしてけり

脇坂甚内使敵城說景遠屬所縻新華

麒麟も老ては駑馬に等しとは。最拷憾き泪をとそ世ふ稱猿に人こ
そ知り給。方便巧にして赤丹兎右衛門景遠は。年は百にもなんぬ老ど。病
鬼の苦痛に屈しも中らに。敵使甚内ふ意對面し。城儀まこと〳〵〳〵
けるを。浮勇剛の脇坂も。心中かとく感抜を。嗚ふ景遠聲をうけ。生
死を爭ふ他軍自軍は。昨今城を攻ぶしさく。使者ふ戒こる汝こそ。なり
ど說客なんぬ為られ。一言半句聆よおよをて呼寄ざるも禮儀なり。新
ど。新對面はるもの。說とも益なし。聆とも論なし。吾病症を看徹

なべ。なや立返ると京にふど。甚内所さく莞尓と笑ひ。大張名誉武勇將
かな。他軍の使者たる乃景遠病床敵くを請せしるを。更に小心の相
もなれば感じてもなか剛なり。足下が明察しふ如くいふも城主
のこの說かなく。道理を解んと来りしなれども。是光秀が使士にあ
ば。羽柴秀吉の隊ふ属する。脇坂甚内といふ者なり。別しく面識なを
ず。望とく當城ふ来ること。和儀降参を說ふ為ば。實優丹州の一
境に足下を邦助兵とくば。一個もなれふ義勇を奪ひ。病中かり緊
く牢居し。大敵といへども恐をやらぬば。寛勇言語ふ盡しがど。然はさ
るながら其覺悟。心將がくれとそなり。其心底をも兼聞たし。且は乃夫
が意注をも若んと。得く参向はるまる。然ることといへども他軍しる乃夫初對
面ふ落る何を。事出なば真偽ト程のかがはるゆく懐遣さんが。身不肩

みきどの乃夫も。侍大將の一個ふかより。信義を重んじ佞邪を含まずして
見に依さく言語ふ絶せず。吾心中は信義をもて足下の覺悟を考こと
を心許なく率こと多なれ。自今波多野家滅亡の朝ふ除こ。信義を
達く共ふ滅ぶる。是誠の信義に所ならずして其所謂いうんとこを推べ。赤井
ハ素より當國の舊家。波多野ハ晩年の家にして。去も名臣といふにも
あらず。些小なる因緣ひるのこ。其を波多野に勾引らるこく。赤井を信ふ
滅さんこと。先祖への不孝これふ過ぎず。足下過ぎぬ道ひりて。戰死の
覺悟しなふこも。赤井の家名を興さらるこバ。解道もあるべしふ。只
一人の心より。數代の家譜を磨滅さもるべ。足下の罪根淺からず舊家
絶ぎを匿くに。偽未なる重寶まぐ。燒棄るる。赤ハ去中に持て。
其結こふ斷絶せん。偉最怪懺ハ候そびや。其分料もいくされば素ふ

波多野に信義を湯ちハ。思村ちしあ向く做なふ偉ふ不審さこと憚
る色なく。又稲らくを東きふぞ。ろ海の赤井系遠も。真理に拔し
て稍要時。會ふるロも朗ざりしが。膝面を撲他と拒大ふ笑ふく。吾心
中ハ鐵石もこれを碎くふ。ふのみうらんとあるひしが。汝ハ說客ハ任
に據こる人品なり。今謂こと所の道理の始終吾肝膽をのく解さ
里。然いさうのもぐ大丈夫の。信義を守る性暴遠。汝が所ゆる舌根ふ
きいけるいふ迷を取まず。古來相傳の家名を弃く。波多野に
刃代勤さるハ不孝なりこの不審ハ理なもこ。貪戰國の習例にして。
遠丹州も古來より。國を國從興慶深沈。義次ふ為こんこども。吾赤井
家ハこ。僥倖に襲ぐるもく見先祖より波多野家ハ信義を達し親し
く好を結ぶもあり。然ふ遠遺波多野一家。織田家に任せ

に及んで。丹波一国の弱兵寡。倹悉く降参に。その弱きと一様なり。乃翁何ぞ赤井家の名代汚し。威を滅し。聽病なりと嘆きたんや。一旦波多野と盟約せし。泰山よりも重し。吾月今先祖代誓を徒に。傳言本意よ背うんこと。是に過ぎる不孝はなしと。嘆ぜ〻し。嘆ぜ〻し。今は赤井の滅ぶる晌到来し〻ぬる。其報ひ。より。滅ぶ〻ぜんを。長く後世に恥を殘さん。如ば潔ふ戦死して。義名を末世に傳へ。なべて。こを。より。報恩なり。唯遠心奥決して。変ぜず。汝若し古論を善と。祖の根固く言動。経板おかいに感嘆か。勇ましき義なり名士の最期。〻〻らぐに何と罵へ。遠新はまるなふをう説ん。其所覚期を聞ふ法きて。念投たる所命の品あり遠義を恢へ得させなべ。せ涯の望全く是なり。他軍なり自軍なるるこれ私の遺恨ふ〻べ。帰〻に勇士の本意を遂させなべ。餘念もかけ〻ふ謂出ぬ。系遠こを伐熟くうち聆。いかふを戦場の他軍自軍ハ主に仕める忠義にして。公私の義別ハ勿論なり。汝と我とハ仇なれとの伐身に恨ふことなべ不自に任せ得さ〻し。思材を咲きと恥て甚内望ハ別の品なり。頼く當家の重寵たる。雄雄番ひ〻新軍ハ是下党朝の戦死ふ落を。譲〻せなべ。他人なるふやたし。他代に探さんことの殘を憾く思めさで。水火の中ふ投じなべ。然さま〻を歴来先祖より。偽ふるところの勇義も消失せ。嫉妬の汚名を殘さ。吾幾久〻〻遠寶代。赤井家にあるとと伐慕懐せり是を譲望なべ。是下の武勇赤井家に名誉を傳へ。其英名に類望く。乃夫も亦功名を。顕を便宜になさ〻欲に。万望のでを伐。稱へなべ。其報恩に是下が最期のおが〻ぬも。在なん。いるある大事

ありぬべくこそ。うらぶれ惟へまつるを。今いつふたゝび相逢せ給へ天神地祇ふ罰ちたまへ。庶幾ハ奏しまつる。徐義ふく望こうけたるふゞ。景遠小時沈吟して。遠者實ふ〳〵據怙しと。謂靜ふ言つく謂らくいふも吾今最期せを新の華ハ。寶も共に失へ奪くおりへ。ふり。然ハとく怪朱鄒故もゆ紀。汝よを作ゝく受興さるゆ忘なし。然ゆゝう愁望の所志の淦かゝれた。道を立く投與爲し。然るふ書紀の朝とゆり。思費ふ〳〵といふといつこも。汝ゞ信義ハ切なる我熟会。遠付安づ紀一品ありゝこを養持しゝ得さゝ。新の華雌雄ハうち。其寶ロを遠ゑこさゞ。其とくも亦咱ふゝ。ゞうゝ進ゞこさ緯ハさハ。是先祖ハの解罰ふり。喝意ふ隨從さゞさや吾やと。所て腸坂膝汗ロ進足下の命言一言ゝうとも。何ゞハ肖逆まうさゞさ。遠與ふる品ゝハ解こそれを相守らん。其義ハ謙意ゝうとつゞも。雌雄雙藏し彼寶器を隻ロ讓ロふる緯ハ世ふ朽惜くおりふゝと雄し撫る我亲遠ゝち笑ロの華ハ少壯ゝう。咱當慄に用ひたゞハ亦日最期ハ合戦ふ用ひゞんゞハのゞゝうゞ。然ゞゝどふ愁ロふハ咱我敵てこれを伝ゞ。息あるうちハ探さゝと。言ハふ甚内其意ロ惜ロ。然ゞ是下ハ遺偽ロ守り。其一品の贈ふハ那般ゝに倣ゑハと密ふ緯ロ諜合せ。今育ハ始終四王日の戦場。堅く約して暮近さゝろ。惟任ゝ陣ふ走帰り亲遠心牢くしゝ。ゞゝ説得る詞かゝ。唯吐上ハ速に去ロ進めゝく蕃地ふ城ロ陥投まんより。外ふ方御ゞゝと東ゞふ。光秀其後ふ隨順し。先や城攻の準備ゞゝと諸勢ふ指揮して莽び赤井ロ攻起る。又ゞ亲遠ハ脇坂と盟約ゝ詞あるふより。其欲ハ成ロ過る刺頸湯

赤井景遠
最期ま
のぞんで
二ツの宝を潛ム
脇阪が許へ
贈る

の赤井又郎家忠が弟十歳ばかりなる稚子ふ。鮎の雌葉を拔奪せ。云士僅ふ一個を添く。背門より送り出し。脇坂甚内康治ハ頻く約せし鐸ふ。赤井ハ服巨二個を情く地ふ當遣し。彼稚子を安拉らせ我陣中へ伴傍せく最寵切に分抱ふし。彼奇品ふる鮎の葉を。義ふ信交せられしかど。後曜まるまぐ歎び續こ。京遠が信義ハ屢嘗嘆し。甚歎ハ敢く眠ものらび。明天の軍を待曉しぬ

赤井景遠約義所殿甚内一馬小西使者

周ハ異の泥水に淪沈。漢の胴人ハ灝城ふ住る。無情よく其德不德を知く。結して面背を。今差ふ赤井家の鮎の葉も。又然り。脇坂の義勇に服せが為ふ。永く其家の寶と成ぬ。其ハ閏記曉ふバ八月廿六日。赤井恵春遠ハ京遠ハ後世の鐸ふバ脇坂に情課せらるれバ今ハ心ふ羅る事ふし。汗時も速く戦死せべしと城を殘らず呼集ひ。酒肴會く愉快ふひ。謀ひつ別離をゆ。白帛ふ引く腫瘍を單ふ。痛苦をとらも厭ふべこそ。今日を涯極と考ふしく奥是旌例を面慓を脊ふ負成し。驍の肥る馬ふ跨ふ。戦提く赤ハ顧眄顧こや各く競めや勇め。縱令いるる者戦をとも。歎る涙と着ふべ。恥を未世ふ記さるふ。先く進めと一聲呼び國風八文字に推開こ。喊を作りく殿畿ハ。惟任方の魁名の諸勢。是を視るより驚くハ。それ赤を出られ鮎の皮暴殺せるまく怖を戒拔るふ。動搖ハ起てふ。りくべも。四方ハ組と崩頽たり。漂汗とを京遠ハ得こうと馬を駈起く。群ゆる歎中へ鴉て投星面背頭脚の擇びふく。膂力に信せて掛起薙伏。勇を奮ふく血戦ハ。遠猛風ふ懼き怖を一個の云ふ近づ

赤井
景遠
義を
賢ふく
昭坂
甚内
ためよ
歐る

き得べ顧ハ突破を接頼せと。雷鳴ゆゝく系遠ゞ自勢を懲まゝた
ゞけ是を。猛将の鞍下に弱卒なく。唱者らゞと憤激し。命涯限と
擬くかゞふ惟任方の軍兵軍。必死の戈矛は當得べ右横た横ふ
礼を以。光秀怒く猛を指揮ゆゝ聲を至有に懲まゝけるゞ
明智左馬助光俊同治右衛門光忠。義田傳義を殺とゝて。近江の勇士
微正魁に進で。激水燃火の猛威を顕ゝし。遠城を殺果せびんバ一足も退
すゞと逃ふ而まゝ懲まされ。欲起稿伏するゞふ。死を究めゝる城を軍。
数刻の軍に疲果。遠陽那丘ふ戦死ゆゝ。五百餘人と所え〳〵負数も殘
激に敗課され。大将系遠を遠護の兵ハ。五六十個は過ざりけゞ。然ど
る赤井系遠ハ。今天を最期の軍ゆれを一歩ま歩退ゞを。毅聲
烈〳〵く掬く廻る。遠胸脇抜甚内い赤井と約せ〳〵調ゆりゝれば楽を

敗ゞゝあるべかゞゞと。出城ゆせ〳〵敢ゝり。大将悪右衛門の仕来を聴もせ
で。親護を在つも。寛刻がかゞゝ愉快。最期の軍戦逐させんと機会を
窺ひ待ゝりしゞ。方便ハ晒こゝ来りぬと。頻く鎧ゝ帯。緘を鉢長
に推拉く。一拍烈〳〵く馬跨出し。系遠的目て独来る。悪右衛門も快活
ゝゝく。顔も嬉氣に莞尓と笑ひ。羽栄ゝ勇士遅ゝ已と。低聲ふ呼ゝり
渉至合。他交もせゞ共右将四臂の双風順逆離合。八蹄ゝ沙の巻舒反
霞。貿方寸分者ら移ゝ。勝敗さらふ見えざりしを。動倒ゆりと悪右衛門
太刀投弁て接んと。平を。甚内撿にもと馬騎懲せ。右聲喊と抱接ゞり。
二撞三撞ゝる毎ふ鐘鳴裁て撞と響。其响はや系遠ゞ。腫病破きく血
煙〳〵ゝを。去来首投ゝとゝに伏ゝ。脇抜上よりふゞ〳〵。有係ふ心哀ゝし
く。首殿〳〵く猶縁の態ゝ。下ゆる系遠聲ゝ。歓を壓てゆふゝか猶

孫に首を他人に撰さんなりと。励まされく氣を生奮し。離情憾氣の首級頗る。彼當懼を脱取て。再三攻撃戦記。保津城外の合戦に揚扱甚円蔵浪ゞ。赤井悪右衛門を殿捷たりと呼る聲に赤井は殘兵或は守城の兵士軍。かりひくに自殺して。終に落城なりたりと。是に依て光秀は丹波一國を平均なし。脇坂等を攜磨へ帰し。光秀秀吉援方より遠征伸を信長公。精しく言状まいらせしかば前年より約束なりとて。丹州六郡三十万石今は共八方ゆるす事是を光秀に賜る。實に莫大の恩顧に感く。横郡の主身なれば。若恩いかく来しとかり。爲に忽ちなくて。心中大に信長を怨ゝ情なれば大將なりと。密に譚話なりもあり。備赤播磨の探題職。羽柴筑前守秀吉は。平山の城に在住して別所家代代の略を。後ゝ之夫し在りけるが。丹波一國平均しく。別所のために翼を失ひ。三木城迫日に滅亡なりし。侍を尋ひ遠等しなり。茲に備前に浮田和泉守直家に去ぬる年より東西の織田毛利の両家に挑躍を尋ひ。強弱を試て在たりしが。上月境の始終といひ。秀吉數度の軍方。尋常なりぬ計をあらば。草樹も靡く威風にしく。毎丹州の軍も。九分は降服せしかどにたとも右衛門羽柴なりでは。特據為紀人外に向うじと心残決して織田方に降参を遂家國を全ふせやと懐ひ起。家臣を褒めく詳議せしに。貪その一議に帰しなる由。誰を頼りく信長使士と。して謂投人と。譚とる時境茲に備前岩山の高夫角屋弥九郎といふものあり。平日浮田家へ出入して軍用金など調達しなるが。家に男子なければ。泉州堺の小西如清といふ者の一子を乞ふて養子とし。名を譲まく弥九郎と號なせ。今年廿一歳なり。強氣にして力強く勇敢しく品美しく。其

態匹夫ともひえざるが賸辯舌利にふ〜く。兵法も亦練磨せり。心相賢
紀也。平日に武士と交情なれを。應對万詞の起居般よく東西熟た
る壮士あり。上方武士の行状も頗ま〜案内知たるべこを浮田家の
臣家と聞らせ。使者たらしめんと緯定まり。即時に魚屋孫九郎を呼
倚せ。直家こゝ〜の使節の調を彼孫九郎に命じつも衣服大ふて類
を脱へ小西孫九郎と名改革こを。播磨なりる羽柴が陣へ従者卒せ
こを急がせける

繪本豊臣勲功記五編巻之一終